第46回 七五読み古事記勉強会
沼河比売と愛
倭塾サロン
小名木善行

前回までのお話

前に妻としていた八上比売は、
先の約束通りに結婚して連れてきていたけれど、
正妻の須世理毘売を畏んで、生んだ子を
木の俣に刺しはさんで帰って行きました。

今回のお話（現代語訳）

八千矛神となった大穴牟遅は、高志の国の
沼河比売を妻にしようと、
比売に歌を送りました。

八千矛神の命（みこと）は、
地元の出雲から妻を娶らず
離れた高志国に
賢くて美しい乙女がいると
聞いてやってきました。
あなたにお逢いした一心で、
旅装束も解かずに、
いきなりこうして寝所の戸を叩いています。
貴女が戸を開けてくれないと、
鳥が目覚める朝になってしまいます。
貴女を慕って天を馳せて来たのです。
まずはお話しませんか？

このやちほこの　かみまかむ　此八千矛神将婚
たかしのくにの　ぬかはひめ　高志国之沼河比売
いでましししとき　ぬかはひめ　幸行之時到其沼河比売之
いゑにいたりて　うたいはく　家歌曰、

夜知富許能　迦微能美許登波
やちほこの　かみのみことは
夜斯麻久尓　やしまくに

都麻麻岐迦泥弖　登富登富斯
つままきかねて　とほとほし
故志能久迩迩　こしのくにに

佐加志売遠　阿理登岐加志弖
さかしめを　ありときかして
久波志売遠　くはしめを

阿理登伎許志弓　佐用婆比尓
ありときこして　さよばひに
阿理多多斯　ありたたし

用婆比迩　阿理加用婆勢
よばひに　ありかよはせ
多知賀遠母　たちがをも

伊麻陀登加受弖　淤須比遠母
いまだとかずて　おすひをも
伊麻陀登加泥婆　いまだとかねば

遠登売能　那須夜伊多斗遠
をとめの　なすやいたとを
淤曽夫良比　おそふらひ

和何多多勢礼婆　比許豆良比
わかたたせれば　ひこづらひ

和何多多勢礼婆　阿遠夜麻迩
わかたたせれば　あほやまに

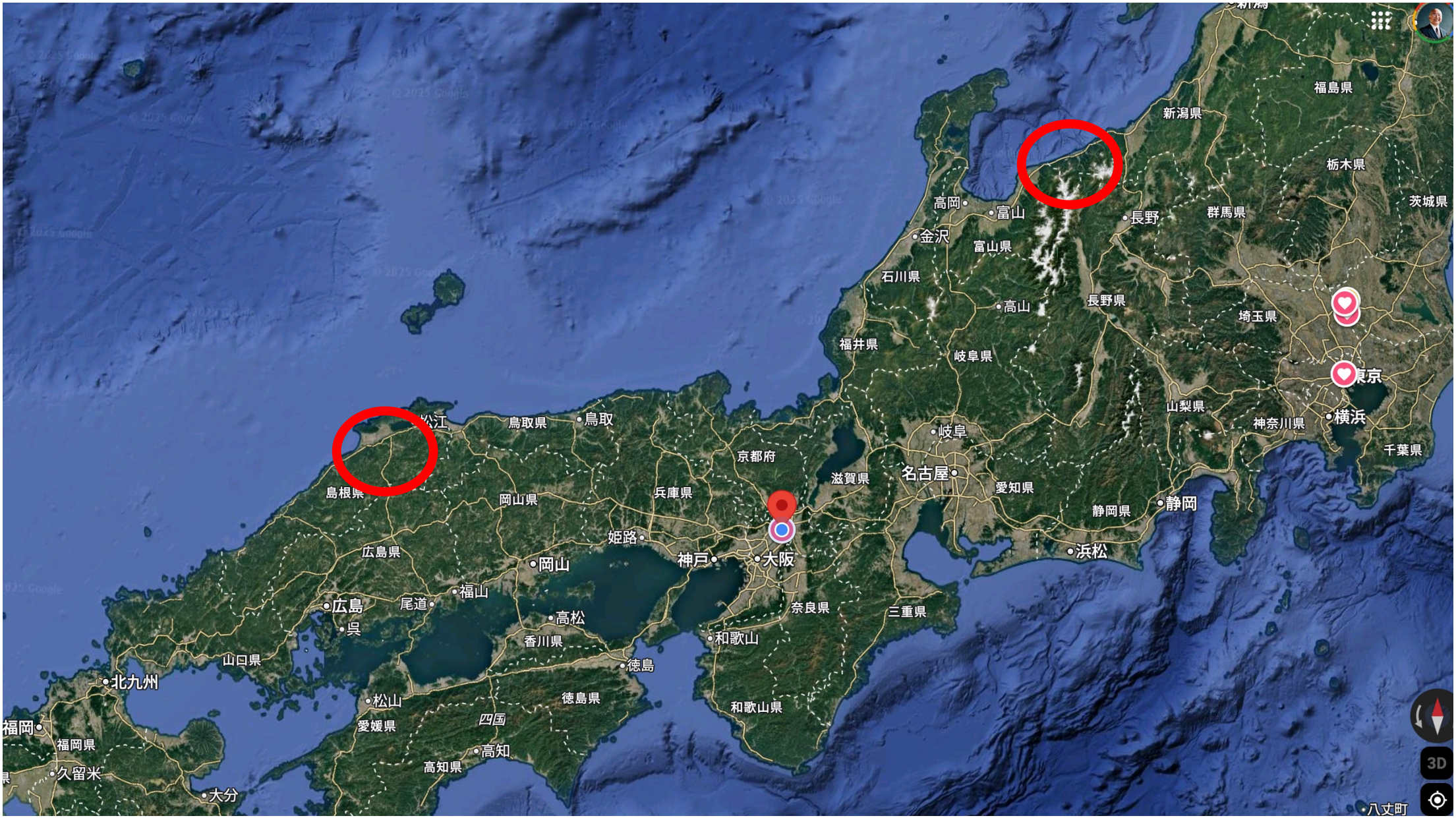
奴延波那伎奴　佐怒都登理
ぬゑはなきぬ　さのつとり
岐藝斯波登与牟　きざしはとよむ

尓波都登理　迦祁波那久
にはつとり　かけはなく
宇礼多久母　うれたくも

那久那留登理加　許能登理母
なくなるとりか　このとりも
宇知夜米許世泥　うちやめこせね

伊斯多布夜　阿麻波勢豆加比
いしたふや　あまはせつかひ
許登能　ことの

加多理其登母　許遠婆
かたりことも　こをば


福島県
新潟県
栃木県
茨城県
群馬県
高岡
富山
長野
金沢
富山県
石川県
高山
長野県
埼玉県
福井県
岐阜県
東京
山梨県
神奈川県
横浜
千葉県
岐阜
京都府
滋賀県
名古屋
愛知県
静岡県
静岡
浜松
鳥取県
鳥取
松江
島根県
岡山県
兵庫県
姫路
神戸
大阪
広島県
岡山
福山
広島
尾道
呉
高松
香川県
奈良県
三重県
和歌山
山口県
徳島
北九州
松山
徳島県
和歌山県
福岡
愛媛県
四国
福岡県
高知
高知県
久留米
大分
八丈町
3D

古事記が、
和歌の記述のときに、
完全に当て字で、
漢字を仮名代わりに用いて
描いているのはなぜでしょう？

八雲立つ
出雲八重垣
妻籠みに
八重垣つくる
その八重垣を

夜久毛多都
伊豆毛夜幣賀岐
都麻碁微尓
夜幣賀岐都久流
曾能夜幣賀岐袁

物語＝漢字で意味を固定化し、多層的に残す
和歌＝当て字で音を忠実に残し、言霊として響かせる

この「意味の固定」と「響きの保存」の対比こそ、
古事記・日本書紀がとった表記の大きな特徴。

1. 歌は「声」としての生命を大切にした

和歌は文字で残す以前に「口誦（くちずさみ）」として存在していました。つまり、意味より 音の響き・リズム・声の流れ が命です。
だからこそ、意味を担う漢字ではなく、音をそのまま写す「万葉仮名的当て字」で表記することにより、
当時の発音や調べを忠実に残そうとしたのではないでしょうか。

2. 物語は「意味」で、歌は「感性」で伝える

ストーリー部分は、歴史的事実や神話の筋を後世に伝える必要がありました。そのため、意味を明確にする漢字が適しています。
一方で和歌は、意味以上に「心の感動」や「霊的な響き」が大事です。
そこに過剰な意味解釈を漢字で載せると、逆に歌の純粋さが損なわれてしまう。
だから「ただ音を借りる」当て字がふさわしかったのだと思います。

3. 「歌」と「漢文」の重層性の違い

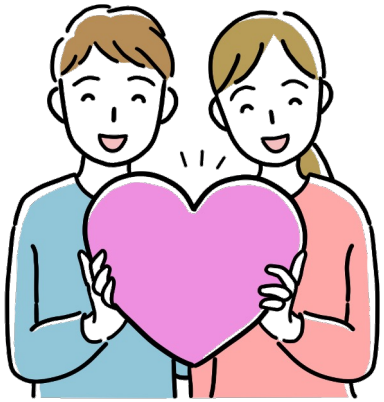
漢文で記した叙事文は、多義的な漢字の意味を重ね合わせて読むことで、物語に奥行きを与えました。
しかし歌は逆に、 **意味を薄めて音を浮かび上がらせる** ことで、読者が自ら感性で補い、自由に解釈できる余地を残しました。
つまり「物語は重層化、歌は純化」という対比です。

4. 神事的な要素

和歌は「言霊」として、神に直接届く祈りでもありました。
だからこそ、文字の意味に引きずられず、 **声に宿る霊力** をそのまま伝えることが重視されたのかもしれません。
「ヤクモタツ」「ヤヘガキ」といったリズムそのものが、呪的な力を持つ。
そこに意味よりも音を優先した理由があるといえるのではないでしょうか。

八千矛神が沼河比売の家に着いて歌ったとあるが、ここで古事記が伝えようとしたのは、
単に軍事力、つまり力によって征服したり制圧したりするのではなく、
女性を娶って子をなす・・・つまり血縁関係を持つことで、極めて平和的に大いなる国を形成していったということと、これを意図して和歌で経緯を残すことによって、
その婚姻もチカラによる強制ではなく、どこまでも「心の響き合い」による合意をもって
大いなる国を形成していったのだということを描こうとしているといえます。

古事記には記述がないが、
新潟県糸魚川市に残る伝承では、
大国主と沼河比売との間に生まれた子が建御名方神（たけみなかた）で、
姫川をさかのぼって諏訪に入り、諏訪大社の祭神になったとされています。



また諏訪でも建御名方神の母を沼河比売としています。

『先代旧事本紀』でも建御名方神は、沼河比売（高志沼河姫）の子と書かれているのです。

つまり大国主神話の息子で、豪遊無双で力自慢に育った建御名方神が、
建御雷神との喧嘩に敗れて諏訪大神となられた歴史も、
そもそも建御名方神の母と大国主神の婚姻が、愛と響き合いによって形成された・・愛の結晶
によるものであったのだということを大切に描こうとしたのです。

夜知富許能
やちほこの　かみのみことは

迦微能美許登波
かみのみことは　やしまくに

夜斯麻久尓
やしまくに　つまままきかねて

都麻麻岐迦泥弖
つまままきかねて　とほとほし

登富登富斯
とほとほし　こしのくにに

故志能久迩迩
こしのくにに　さかしめを

佐加志売遠
さかしめを　ありときこして

阿理登岐加志弓
ありときこして　くはしめを

久波志売遠
くはしめを　ありときこして

阿理登伎許志弓
ありときこして　さよばひに

佐用婆比尓
さよばひに　ありたたし

阿理多多斯
ありたたし　よばひに

用婆比迩
よばひに　ありかよはせ

阿理加用婆勢
ありかよはせ　たちがをも

多知賀遠母
たちがをも　いまだとかずて

伊麻陀登加受弓
いまだとかずて　おすひをも

淤須比遠母
おすひをも　いまだとかねば

伊麻陀登加泥婆
いまだとかねば　をとめの

遠登売能
をとめの　なすやいたとを

那須夜伊多斗遠
なすやいたとを　おそふらひ

淤曽夫良比
おそふらひ　わかたたせれば

和何多多勢礼婆
わかたたせれば　ひこづらひ

比許豆良比
ひこづらひ　わかたたせれば

和何多多勢礼婆
わかたたせれば　あほやまに

阿遠夜麻迩
あほやまに　ぬゑはなきぬ

奴延波那伎奴
ぬゑはなきぬ　さのつとり

佐怒都登理
さのつとり　きざしはとよむ

岐藝斯波登与牟
きざしはとよむ　にはつとり

尓波都登理
にはつとり　かけはなく

迦祁波那久
かけはなく　うれたくも

宇礼多久母
うれたくも　なくなるとりか

那久那留登理加
なくなるとりか　このとりも

許能登理母
このとりも　うちやめこせね

宇知夜米許世泥
うちやめこせね　いしたふや

伊斯多布夜
いしたふや　あまはせつかひ

阿麻波勢豆加比
あまはせつかひ　ことの

許登能
ことの　かたりことも

加多理其登母
かたりことも　こをば

許遠婆
こをば

「和歌で描いた」という事実そのもの に込められたメッセージ

1. 八千矛神＝力の象徴を超える転換

大国主が「八千矛神」と呼ばれるとき、それは 軍勢・武力による支配者像 を示しています。

けれど、その「八千矛神」がわざわざ和歌を詠み、求婚の心を歌に託した。

ここに「力による征服」ではなく **心の響き合い＝婚姻による平和的統合** を目指した物語の方向性がある。

つまり「矛」ではなく「歌」で国を広げた王として描かれているわけです。

2. 和歌が担った役割

叙事部分で漢字を用い、軍事や地理を記録として残した。しかし求婚場面では、和歌を挿入した。

これは **「ここは記録ではなく、心の交わりだ」** という切り替え。

歌は **音（響き）と言霊** の形で記されることで、**強制ではなく 心の共鳴**による合意 を象徴する。

言い換えれば、和歌の表記自体が **「これは愛の物語である」** という強調になっている。

3. 沼河比売との婚姻の意味

沼河比売の伝承と建御名方神の誕生を重ねて考えると、
大国主の「婚姻外交」は単なる神話的恋物語ではなく、
国づくりの根幹 だったことが分かります。
出雲から高志へ → さらに諏訪へ
　　血縁を通じて、地域を平和的に結びつける
　　その結晶として生まれたのが建御名方神
つまり、建御名方神は「愛と共鳴による国づくり」の象徴的存在なのです。

4. 建御名方神の運命と意味

建御名方神は、やがて建御雷神に敗れ諏訪へ退きますが、
彼の存在そのものが「国譲り」の物語を繋ぐ重要な媒介になっています。
そしてその根本には、 大国主と沼河比売の「和歌による婚姻」 があるのです。

古事記は、建御名方神の出自をただの系譜ではなくて、**愛の結晶**として描くことで、
国の平和的統合の物語に一層の重みを与えている のです。

建御名方神の「敗北と諏訪入り」って、表面的には「負けて退いた」話に見えるけれど、
古事記全体の流れで読むと、まさに **布石** といえます。

1. 「敗北」が意味するもの

建御雷神に抗して敗れたことは、単なる軍事的な勝敗ではなく、
武力による支配を終わらせるための象徴的な出来事 だったと考えられます。
つまり「武」ではなく「譲る」「共生する」方向へ、物語が大きく転換する瞬間です。

2. 諏訪に根を下ろす意味

諏訪大社の祭神となった建御名方神は、中央権力に従属するのではなく、地域の神として深く根付いていきました。
これは「共生の秩序」を地域ごとに広げるための布石であり、やがて「国譲り」という大調和の物語に繋がっていきます

3. 大国主神話からの流れ

大国主：和歌で婚姻を結び、血縁で国を広げた
建御名方：戦って敗れるが、諏訪で新たな共生の道を歩む
そして国譲り：最終的に「武力」ではなく「合意」によって国を渡す
この流れ全体が、**「響き合いの文明観」** の先駆け。

つまり、建御名方神の敗北は「終わり」ではなく、
むしろ**「共生の道」を開くために必然的に置かれた 布石**。
古事記はそこまでを見越して、この物語を組み立てているといえます。

こうしてみると「国譲り神話」も、ただの政権交代ではなく、
日本文明が“支配から響き合いへ”移行していく物語 ということができます。

古事記が描く文明の進化の道筋

武力
による
制圧

生太刀
生弓矢

八千矛神

婚姻
による
統合

沼河比売

共生
による
調和

歴代皇室
知らす国